

手芸等が可能となった他、補助具を用いた箸の使用も可能となっている。【結語】本症例の様に、示指のみがほぼ健常に保たれ、母指・中指・環指・小指が切断された症例はその損傷形態としても比較的稀と考えられる。このような症例に対し、損傷指を用いて母指化術を行うことは、失われた母指機能を再建するという本来の目的を達成するだけでなく、良好な機能を有する残存指を温存するという点においても有用な方法と考えられる。

#### 4. 陳旧性小指基節骨頸部骨折の1例

設楽 仁 (済生会前橋病院 整形外科)

【はじめに】小児の基節骨頸部骨折の分類に騎乗型と回転型があるが今回我々は陳旧性の騎乗型骨折に対して積極的に可動域訓練をすることにより remodeling されたといった症例を報告する。【症例】11歳男児。サッカー中に他人と接触して受傷する。翌日近医で整復およびシーネ固定を受けその後定期的な X-P 検査受けていたようだが4週目になり X-P 上転位 (+) とのことで紹介される。当院初診時すでに仮骨ができており、この時点で骨切り矯正を行うと軟骨の変性を生じる可能性があったため積極的にリハビリを行い骨折部の remodeling を図ることとした。【結果】X-P 上約6ヶ月で初診時中樞骨片と末梢骨片の角度が55度であったものが20度に矯正され、関節裂隙の狭小化も認めない。

#### 5. 当院における手指外傷の特徴と sideswipe injury の3例

星野 貴光, 竹内 公彦, 浅見 和義

松下 正寿, 荒 毅, 久保井卓郎

(前橋赤十字病院 整形外科)

当院における上肢手術の割合は全手術の45%を占めており平成15年度は303件であった。このうち外傷は235件で手指の外傷は84件で36%であった。当院における手指外傷の特徴として挫滅が多く、顕微鏡的な手技を必要とするものや腱縫合がその大部分を占めているかわりに手根骨の骨折はあまりみられない。sideswipe injury とは、車の窓枠に肘を置いているときや、窓枠より上肢を出している際に、対向車や壁に衝突し生じた上肢の外傷で、その損傷の程度は様々であるが、われわれはこれまでに高度な sideswipe injury の3例を経験したので多少の考察を加え報告したい。

#### 6. 当院における PIP もしくは MP 関節内骨折とロッキング現象を呈した症例の手術治療経験の報告

高橋 敦志, 長谷川 仁, 長田 純一

小林 史明, 中村 篤司, 本田 哲史

(伊勢崎市民病院 整形外科)

今回のテーマの『手指の外傷』の中でも比較的頻度の低い外傷ではあるが、PIP 関節、MP 関節での関節内もしくは関節周囲の外傷の手術治療経験を報告します。PIP もしくは MP 関節内骨折の手術治療経験が3例で、創外固定器や吸収ピンを用いた症例や保存的治療にて症状軽快せず偽関節術を要した例を報告します。PIP および MP 関節の外傷性ロッキングもしくは弾発現象を生じた症例の手術治療経験が5例で、ロッキング現象が母指 MP 関節2例、示指 MP 関節1例、弾発現象を呈した PIP 関節症例が2例である。以上の症例の治療経験を若干の文献的考察を加えて報告します。

#### 7. 小指 PIP 関節脱臼後に PIP 関節受動術を要した一例

足立 智, 山本 敦史, 小林 勉

大沢 敏久, 篠崎 哲也, 高岸 憲二

(群馬大院・医・機能運動外科学)

右小指 PIP 関節脱臼後に、PIP 関節屈曲拘縮をきたし、PIP 関節受動術を要した症例を経験した。PIP 関節脱臼は日常診療の中で経験することの多い外傷のひとつであるが、初期診療を誤ったり不適切な初期治療を行うと満足な結果が得られないことがある。そこで、今回、PIP 関節脱臼の診断と治療の基本的概念を整理して、今回の症例の経過と併せて考察したので報告する。

#### 8. 当科で行っている TKA 手術時の工夫

樋口 博, 畑山 和久, 高岸 憲二

(群馬大学 整形外科)

末期の膝関節 OA についての治療法として、人工膝関節形成術 (TKA) は有効性の高い治療方法であると言える。しかし、手術侵襲は比較的大きく、高齢者に適応するには術後出血の問題などいくつかの問題点がある。また、TKA は除痛効果が高い反面、関節可動域の低減や膝関節安定性の変化など問題点が残存し、正常膝の再現には到っていない。当科では、年間40-50例程の TKA を施行し、このような問題点を克服するべく、いくつかの臨床研究を治療に並行して行っている。今回の発表では、その臨床研究の中で、骨セメント使用についての結果と、プロステーシス設置や gap の調整などを工夫することによる関節可動域の改善法について紹介する。今回の報告以外にも、TKA に関する研究も取り組んでおり、症例数をより増やして検討したいと考えている。